


研究者総覧：藤井 たぎる (FUJII, Tagiru)

氏名	藤井 たぎる (FUJII, Tagiru)	
職名	教授	
所属講座	国際多元文化専攻先端文化論講座	
学位（専攻分野）	修士（文学）・名古屋大学	
メールアドレス	fujii@lang.nagoya-u.ac.jp	
個人のホームページ	http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/staff/fujii.html	
研究分野	音楽思想	
	西洋音楽史	
	前衛芸術論	
現在の研究テーマ	西欧近現代音楽の資本主義的構造の解明	
所属学会	日本独文学会	
	オーストリア文学会	
主要著書・論文	「ルルという名の貨幣」『ミクスト・ミュージズ』増刊号、愛知県立芸術大学音楽学部音楽学コース、2011年	
	「J-Pop 的恋愛法：八代亜紀から宇多田ヒカルへ～恋愛モードの変化を探る」『Autres』第4号、2011年	
	「モーツァルトのダ・ポンテ三部作における恋愛技法」国際シンポジウム『戯れのテクノロジー』論文集、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2010年	
	「“剥き出しの生”、“剥き出しの音”」『言語文化研究叢書』第8巻、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2009年	
	「不協和音の恐怖」国際シンポジウム『恐怖からの思考：現代世界を解明する』論文集、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2009年	
自己紹介文	<p>最近あれこれ頭をひねっているのは、西洋音楽の構造と資本主義の仕組みの相同性についてです。調的和声というコード進行に基づく音楽のつくりは、まるでマルクスの価値形態論のようですし、シェーンベルクやベルクの12音技法に至っては、“価値の増殖”を音符で表象しているかのようです。西洋音楽史は資本主義の発展と不可分であるということなのでしょう。いわゆる現代音楽でも事情は同じです。アメリカの作曲家ジョン・ケージはひとつの境界、4分33秒という時間の境界を描くことによって、サウンドとノイズの間にある境界を消してしまいました。そこではあらゆる音が Chance Operation によって静寂という“地”のうえに無作為にばらまかれ、そのつど不定形な“図”を描くことになるわけです。このようにある境界を引くことは、同時</p>	

に別の境界を消すとともに、その境界の消失はあらたな別の境界を導き出すこととなります。そしてまたそれがふたたびさらに別の境界を消失させるとともに、あらたな別の境界を必然的に導き出し、それがまたまた別の境界を消失させ……、といった具合に、消失と再生を繰り返しながら、音楽芸術もまたこれまで自己増殖してきたわけです。おそらく資本主義が終わらない限り、今後もこの自己増殖は繰り返されていくことでしょう。そんなことを、自己増殖してきた数々の音楽を飽きもせず聞き続けながら考えています。



シンポジウム「境界の消失と再生：現代音楽の諸相」（名古屋大学大学院国際言語文化研究科・愛知県立芸術大学音楽学部共催、2010年12月4日）における作曲家マイケル・シェリー（バトラー大学教授）の基調講演より

受験生へのメッセージ

音楽を学んだり、研究したりすることは、べつに芸大や音大の専売特許ではありません。音楽を人文学や社会科学の研究課題とすることは、珍しいことでもなんでもありませんし、むしろ領域横断的な研究は、いわゆる音楽学をさらに活性化するに違いありません。実際、日本の場合、総合大学に音楽学部がないのが不思議なくらいです。楽器を弾いたり、歌ったりするスキルを身につけることだけが、音楽を学ぶこ



ザルツブルクの楽譜店

とではないということです。ソルフェージュもできない人間に、音楽について語る資格はない、などと言うような作曲家や音楽学者は、少なくとも私の友人や知人には一人もいません。演奏家のなかにはもしかしたらそう考える方もいらっしゃるかもしれませんが（笑）。それはともかく、音楽を題材に、ジャック・アタリのように政治経済について語ることもできるし、あるいはスラヴォイ・ジジエクのようにイデオロギーについて論じることもありなのです。もちろんクラシックであ

れ、**J-Pop** であれ、映画やゲームのサウンド・トラックであれ、扱い方ひとつで、刺激的な研究テーマはそれこそ無尽蔵です。あるいは、あなたがいわゆる音楽評論に疑問を感じているとしたら、音楽評論そのものを狙上に、音楽批評の歴史を研究してみても面白いでしょう。いずれにしても、音楽を素材に思考実験することに興味のある方、歓迎です。